【エッセイ】

優秀な子は怖い？

―「夢十夜」と「風土記」を通して―

清水典子

闇の中を親が六つになる子どもを負って歩いている。夢の中の出来事をつづった夏目漱石「夢十夜」の一遍である。慥かに自分の子である。ただいつの間にか、眼が潰れて青坊主になっている。声は子供の声に相違ないが、言葉つきはまるで大人である。しかも、対等だ。「自分」は我子ながら少し怖くなり、こんなものを背負っていては、この先どうなるか解らない。どこか打遣やる所はなかろうかと闇の中を探す。大きな森が見えた。あすこならばと考え出す途端に、背中で、「ふふん」という声がした。

子どもはかわいい。親にとって、子どもは自分の分身であり、宝物である。世の親たちは、我が子がこの世に誕生した瞬間、生涯で一番の喜びをかみしめるであろう。しかし、また、親となったものが宿命として逃れられない確執も、この瞬間から生まれる。

一般に、親は子を無条件に愛するものである、と考えられている。しかし、本当にそうであろうか。

テレビのニュースや新聞報道では、連日、親による子の虐待、子による親への暴力、さらには親子間の殺人事件など、目を覆うような事件が続いている。

本来、人間は、本能として、「無力で、従順で、無害なもの」に対しては、穏やかに優しく振る舞えるが、一度、それが、自分にとって、「有力で、反抗的・主張的で、有害なもの」に対しては、鬱陶しさや危険、脅威を感じ、それらを排除しようとするのではないか。

「夢十夜」に登場する子どもは「自分」の背中に「食い付いていて、過去・現在・未来を悉く照して、寸分の事実も洩らさない鏡のように」光っている。そして、ついに、クライマックスで、「此所だ。此所だ。」といって、百年前に「自分」が犯

した殺人の記憶を突きつけるのである。

親とて、人間である。常に立派であれと言うのは、無理な話かもしれないが、この話のように、子どもに自分の罪を知られていたり、自分の犯した罪を暴かれるというのは、ずいぶん恐ろしい話である。

古代の物語「風土記」にもこんな説話がある。

「播磨の十四丘」「出雲の潮神」は、共に非凡な能力を持った子どもを恐れて捨てるという話である。その結果、どちらの親も、捨てた子どもからひどい目に遭わされる。

また、常陸國風土記の「那賀の郡」の中にも、親が子を恐れて捨てるという説話がある。茨城の里にあるくれふしの山に二人の兄妹が住んでいた。兄の名を努賀畔古、妹の名を努賀畔咩といった。この妹のもとに「姓名も知らぬ人が常に就て求婚ひ」妹は一夜のうちに懐妊する。そして、ついに子どもを生んだ。ところが、「生んだ子が蛇だった」というのである。しかも、その蛇は、子どもらしからぬ言動を行い、母親と伯父に恐怖さえ感じさせている。それ故に、「父のもとに行ってしまいなさい」と母に言われるのである。子どもである蛇は、母の言葉に従おうとするものの、そこはまだ子ども、「哀しみ泣き、面を拭ひて」母にすがって言うのである。「一身の獨去きて、人の共に去くものなし。望請はくは、あはれみて一の小子を副へたまへ。」(お願いですから私を哀れんで一人の従者をつきそわせてください。)と涙ながらに頼んでいるのである。しかし、この母は「我が家にあるところは、母と伯父とのみなり。是も亦、汝が明らかに知るところなり。人の相従ふべきもの無けむ。」(我が家にいるのは母と伯父だけで、このことはお前もまた明らかに知っているとおりです。お前に従っていくべき人はありません)と冷たく突き放す。子どもは怒り、その憤りを我慢できず、ついに伯父を震殺してしまった。その母は驚いて我が子に瓮を投げつける。そのために、蛇は天に昇ることができなくなってしまった。

この説話では、我が子は「蛇」として生まれている。古代では、蛇は「神」の象徴であったようだ。ここでは、神の子＝非凡→非凡への恐れ→「蛇」という表現になっている。

初めて読んだとき、私は正直にいって、「なぜ、せっかく生んだ我が子が蛇なのだろう」と不思議に思った。そして、気持ち悪いと感じた。いくら何でも、生まれた子を「蛇」などとしなくてもよいではないか。たとえ、神の化身であっても、子どもが「蛇」では、愛することは難しい。

それを現代の親子関係に置き換えたとき、この「蛇」のように親にとっては、持て余すような能力を持つ子どもである場合、我が子が「かわいくない」と悩む親や親子関係がうまくいかないようなことはあるだろう。非凡な子が生まれた場合、「夢十夜」や「風土記」に見られる「子どもを捨てよう」という考えが親に浮かぶのかもしれない。

我が子であっても、子どもが子どもらしくない振る舞いをしたとき、有能で親の手に余るとき、子どもは、畏怖・恐怖の対

象に成りうる。親子の間に潜む闇を描いた作品がこんなに昔からあったのである。

子どもは、小さくても小さいなりに、一人前である。小さいながらに、自分なりの考えを持ち、毎日を一生懸命、未来に向かって生きている。そんな有能な子どもに、親である大人は負けないように学び続けなければならない。子どもに畏怖を感じるのではなく、大人が畏怖を感じさせる側になるのだ。そして、子どもから大人が尊敬されるような社会を作り、胸を張って生きていきたいものである。

（埼玉大学大学院・羽生市立新郷第一小学校教諭）